
第31回 国際アジア・北アフリカ 人文科学会議 —コロキアムA— 略報

雪 嶋 宏 一

I

1983年8月31日、東京国立劇場において、第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議 (Congrès International des Sciences Humaines en Asie et en Afrique du Nord, 略称 CISHAAN) の開会が宣言された。アジアで初めての開催である。世界50余カ国から1800人以上が参加し、800を越える発表が予定されるマンモス会議であった。9月1～3日は東京の赤坂周辺を、5～7日は京都の国立京都国際会館を会場にして議事が進められた。

この会議は、もとは「国際オリエンタリスト会議 (Congrès International des Orientalists)」という名称をもち、今大会で110年の歴史を持っている。ヨーロッパの東洋学者間の学問交流を目的に、1873年パリで創設 (第1回大会) され、両大戦を経て東洋学の最大の国際会議にまで発展した。それに伴ない、アジアからの参加者が増大し、ヨーロッパ中心の観点が批判された。百周年にあたる1973年の第29回大会 (パリ) において、ヨーロッパ的視点の反省の意味を込め、名称が現在のものに改められた¹⁾。この会議では、従来部会は分野別に構成されていたが、今大会ではテーマ別の部会が設定された。会議は次の29部会から構成された。テーマ別の研究部会 (Section 1-19, さらに Sub Section に分かれたところもある)、今日的研究の動向・方法論等の情報交換を行なうセミナー A (1-6)、日本の文化社会の伝統を論じるセミナー B (1.2)、図書館・研究所・学会の活

動の情報交換を行なうコロキア（コロキアムA，B）である。

II

これらの部会の中で、コロキアムAは他とは性格を異にする会議であった。それは、この部分が国際東洋学図書館員連合（International Association of Orientalist Libraries, 略称 IAOL）により主催されるもので、それ自体 IAOL の総会となっているものであるからである。

IAOL は、1967年の第27回国際オリエンタリスト会議（アン・アーバー）の際に組織され、次の第28回大会（キャンベラ、1971年）において第1回総会を行なっている。また、1979年8月にマニラで開催された国際図書館協会連盟（International Federation of Library Associations, 略称 IFLA）の総会では合同会議を行なっている。

IAOL の設立主旨は、第1に、全世界の東洋学関係の図書館及び研究機関相互のよりよいコミュニケーションの発展であり、第2には、共通の問題を討論する場の提供、そして第3には、関係機関の国際的な相互協力の改善である。現在、会員は27カ国から235名を数えている。会長はフィリピン国立図書館の Serafin D. Quason 博士で、事務局はフィリピンのケソンシティとハワイに設置されている。そして、International Association of Orientalists Librarians Bulletin を半年毎に刊行している。我が国からは、国立国会図書館、国際文化会館、金沢工業大学図書館等が参加している。我が早稲田大学図書館も現在参加手続中である。

今大会で4回目を迎えた IAOL 総会（コロキアムA）は、東洋文庫文庫長榎一雄博士を召集者として、9月1日と2日の2日間、上智大学において行なわれた。その内容は、基調報告3、発表15からなり、図書館・研究所の活動報告や問題提起、専門的資料の収集に関する発表等が含まれていた。会議参加者は最高30名程度で、小規模なものではあったが、東南アジアの参加者の熱気が感じられた。

本稿では、これらの報告の中から興味深いと思われるもの9点を選び、

簡単に内容をまとめ、会議のレポートとしたい。

III

会議初日の午前中は3編の基調報告が行なわれた。最初に報告を行なった榎一雄氏は、「新しいアジア研究と図書館の再編成」という題で、日本における東洋学研究的現状と東洋文庫の改革について述べた。最近の榎氏の活動は、すべて東洋文庫と共にあり、その改革に学者生命をかけているとさえ思われる。従って、氏の報告の随所に責任の大きさを感ぜさせるものがあった。

続いて基調報告に立ったアメリカ合衆国議会図書館(LC)の地域研究部長 W. Tsuneishi 氏は、「書誌情報の国際分配—東アジアの場合—」と題して、LC を中心とした合衆国の諸図書館におけるアジア資料の収集・整理の近況を述べた。アジア資料を扱う場合、多様な言語と文字は、機械処理による情報の一元化に大きな障害をもたらす。ヨーロッパの言語と同様に取扱おうとすれば、ローマナイズして表記するところであるが、日本語・アラビア語・中国語・朝鮮語・ペルシア語・ヘブライ語・イディッシュの7か国語(各々の頭文字をとって JACKPHY グループと呼ぶ)は、それだけでは利用者に十分でなく、個々の文字を表記する必要がある。そのため、JACKPHY グループについては各々の文字のまま機械処理を行なわねばならない。このような要望から、それらの機械処理に関する研究開発プロジェクトが発足した。特に、中国語・日本語・朝鮮語(CJK)の漢字文化圏のための研究が、1974年より、ハーバード、イエール、コロンビアの各大学図書館とニューヨーク公共図書館とからなる研究図書館群(Research Libraries Group, RLG)の手で着手された。一方、1978年にはナショナル・プランとして東アジア図書館共同体(East Asian Library Community)が組織され、先行開発を進めていた RLG と LC を含めた共同開発がスタートした。現在、RLG は34館からなり、ネットワークを組織して機械処理のシステム開発を推進している(Research Libraries Infor-

mation Network, RLIN)。このような開発の結果、漢字文化圏用のキーボードが製作され、RLG、RLINで、オンライン化が整備されつつある。LCもこれにより、RLINに入力する日が迫っている。こうして、北米大陸における東アジア資料の書誌情報のMARC化は現実のものとなったのである²⁾。

基調報告の最後は、オーストラリア国立大学(ANU)図書館(キャンベラ)のE. Bishop 女史³⁾の「1980年代のアジア資料コレクション—オーストラリアの展望—」というものであった。女史は、長年ANUにおいてアジア資料収集に務めており、その経験を生かしてANUにおける収集活動の問題点を提起した。オーストラリアにおけるアジア資料の収集は1960年代以降に開始され、近年一層活発化している。それはオーストラリア政府の方針と歩調を合せて行なわれているものである。ANUにおけるアジア資料収集の中心は中国・日本・インドネシア資料にあり、それらのコレクションの運営体制が一応確立している。最近では、アジアに対する関心の増大から、中近東や朝鮮の資料にも注意が払われている。このような収集活動の拡大化は、一方では整理・配架の面で、新たな問題を提起している。つまり、言語的能力を有するスタッフの不足、情報の機械処理が困難なこと、配架スペースの不足である。特に、第2の問題は国際的な情報交換が必要とされるものである。このような女史の報告は、そのまま早稲田大学図書館にも通じるところがあり、興味深いものであった。しかし、オーストラリアにおけるその打開策が示されなかったのは残念であった。

午後からは一般の発表が始まった。最初に登場した国立国会図書館の今川浩一氏はJAPAN MARCの沿革と現状を報告した。我が国では、それは周知のことであり、別に目新しいこともなかったが、外国からの参加者には興味深いものであったらしく、特に、カバー率の点に質問が集中した。

東京国立博物館の大隅晶子女史は、今年秋博物館内に閉館が予定される日本美術の研究情報センターの概要をスライドを使用して説明した。このセンターの設立目的は、長い博物館の歴史の中で蓄積されてきた多種多様

な写真・図書資料等の利用を容易にし、研究者の要望に応えようとするものである。5年前からシステム開発に着手し、まず第一に、日本美術資料の分類を次頁の表のように体系づけた。そして、それに基づいたカード式目録を編成し、検索を可能にした。特に、写真資料に関しては、4種類の索引カードを作成し、ネガの管理と利用を容易にしようとしている。しかし、これらのカード体目録は当分機械処理を行なうには至らず、オンライン情報検索は遠い将来のことになりそうである。従来から図書行政の立ち遅れが指摘されている博物館だけに、情報がカード体によって容易に検索できるようにするだけでも前進と言わざるをえない。今後の発展に期待したい。

第2日目の最初に立ったのは、LCのインド出張所の E. G. Smith 氏⁽⁴⁾である。氏は「アジア・北アフリカにおける LC 海外資料収集計画」と題して、最近の活動報告を行なった。LCの海外出張所の活動については、我が国でもよく知られている。1980年代のこの活動方針は、アジア及び中近東資料の受入れ・書誌的操作に関する国際的な相互協力の推進であるという。前述の通り、LCはアジア資料についての情報の機械処理に多大な関心をもっている。それはアメリカ国内だけで解決する問題ではなく、関係各国との協力が必要である。海外出張所が目指す方向は、その問題と密接に関係しているのである。

東洋文庫研究員の志茂硯敏氏は、「日本におけるペルシア語文献の総合目録の編集と出版」と題し、今秋刊行された国内ペルシア語文献総合目録について報告した。京都大学附属図書館と東洋文庫とによるペルシア語文献の大量収集は図書館界でも大きな話題であった。これを契機に、研究者間でユニオン・カタログの出版が提案され、東洋文庫を中心に編集作業が進められた。その結果が、Union Catalogue of Printed Books in Persian Language from Selected Libraries of Japan として結実した。国内58館が所蔵するペルシア語文献約14000タイトルが収録されている。特に、イラン現代史に分類される621タイトルの図書の大半は、志茂氏自身がイラン革命の最中に現地でも収集したイラン革命関係資料（東洋文庫所蔵）であ

CLASSIFICATION OF JAPANESE PAINTING BY SUBJECTS

First		Second	
0	General		
1	Religion	0	
		1	Mandalas
		2	Buddhas
		3	Bodhisattvas
		4	Vidyā-rājas
		5	Devas
		6	Disciples and Arhats
		7	Shintō Deities
		8	Others
2	Portraits	0	
		1	Emperors and Nobles
		2	Priests
		3	Warriors
		4	Commoners
		5	Others
3	Literature	0	
		1	Buddhist Scriptures
		2	Religious legends
		3	Biographies
		4	Romances
		5	Essays and Traveloques
		6	Poetry
		7	Others
4	Chinese Legends	0	
		1	Zen Patriarchs and Zen Enlightenments
		2	Admonitions and Legendary Figures
		3	Others
5	Landscapes and Flowers & Birds	0	
		1	Landscapes
		2	Flowers & Birds
		3	Seasonal Sceneries
		4	Others
6	Genre Subjects	0	
		1	Scenes in Famous Places and Cities
		2	People in Various Engagements
		3	Merry-makings
		4	Westerners
		5	Others
7	Others		

り、世界に類をみない貴重なコレクションである。このような地道な目録編集作業は今後の研究に計り知れない影響を与えることは疑いない。蛇足ながら、早稲田大学図書館所蔵の貧弱なペルシア語文献も本目録に収録された⁵⁾。

マレーシア国立大学の Ding Choo Ming 氏は、「東南アジアにおける東南アジア研究学位論文へのアクセス」と題して、東南アジア地域研究の現状分析と問題点の提起を行なった。東南アジア地域研究をテーマとした学位論文の過半数は現地の学者によって提出され、残りの部分の多くは北アメリカ大陸において発表されている。しかし、Dissertation Abstracts に収録されるものは後者だけで、過半数を占める前者の情報を入手するのは、非常に困難である。このような状況が生じる原因は、現地において情報が一元化されていないためである。こうした研究上の障害を取り除き、東南アジア全体の研究活動を促進させるためには、関係各国が国家的プロジェクトで情報のネットワーク作りをせねばならない。フィリピンにおいては、学位論文の総合目録が編集されて利用の便に供されているが、他の国々では、図書館自体が未発達なため、実現には程遠い。しかし、東南アジア全体の情報のネットワーク化を推進しない限り、このような情報へのアクセスは容易ではなからう。Ding 氏発表のフルペーパーには、17頁155点もの東南アジア研究学位論文に関する文献目録が添付されており、貴重なものである（早稲田大学図書館所蔵。請求番号：A E 4664）。

続いて報告を行なった H. Jarvis 女史は、シドニー大学東南アジア資料書誌情報プロジェクト (Bibliographic Information on Southeast Asia, 略称 BISA) の局長である。女史は、「BISA の最近の発展とヴェトナム語指導計画 (Recent Developments in BISA, with Specific Reference to the Vietnamese Pilot Project)」と題して、このプロジェクトの近況を述べた。BISA は1980年にオーストラリア開発援助事務局によって設立された東南アジア資料のデータベース構築プロジェクトである。一方、オーストラリア諸大学国際開発計画に加わり、東南アジアの図書館員の養成

をも行なっている。現在、BISA に蓄積されたデータは20万件を越え、オーストラリア文献情報ネットワークにも参加しているため、全世界からアクセスすることができる。1981年以降、雑誌論文の入力にも着手し、Far Eastern Economic Review 等のデータも蓄積され続けている。このようなデータベース構築と平行して、BISA ではデータのマイクロ・フィッシュ化を進め発売している。蓄積されたデータの中心はインドネシアとシンガポールのものであるが、最近ではフィリピンとヴェトナム資料の入力が開始された。特に、ヴェトナム語資料に関しては、ヴェトナム語の機械処理の開発に成功した。ヴェトナム語固有の多数の発音記号の処理を可能にした功績は大きいものである。このような開発をもとに、現在 BISA では、アメリカ、フランスにおけるヴェトナム語文献をも含めたユニオン・カタログを企画中であるという。今後の活動に注目したい。

IV

筆者にとって、このような国際会議に出席することも、海外の諸図書館がどのような活動を行なっているのかを身近に見聞することも初めての経験であった。そのためか様々な情報は新鮮にさえ感じられた。

会議において、参加者全員が一致して抱いていた問題は、政治・経済・社会・民族・言語のいずれにおいても極めて多様性をもつアジアの資料を、一体どのように収集・整理し、利用に供するのか、どのように情報を一元化していくのかということであったはずである。それは単に欧米人にとっての問題ばかりでなく、我々アジアの人間にとっても大きな問題である。とりわけ、テクノロジーの高度に発展した我が国等では、第一に検討されねばならない問題である。この点で、合衆国の RLG の研究開発とオーストラリアの BISA の活動は強調されねばならない。我が国では近年やっと日本語文献の MARC が軌道に乗ったばかりである。今後は MARC の拡大と迅速性とが国内外から要請されるはずである。それと共に、他国語資料の情報の一元化が必ずや問題になるに違いない。その時、我々図書館員

は合衆国やオーストラリアのシステムをどのように導入し発展させていくかを問われるであろう。

一方、今回の会議においては、アラブ=イスラム及び中近東関係の資料に関する問題は極めて手薄であった。これをテーマとする発表は志茂氏によるもののみで、予定されていた Index Islamicus の近況報告は実現されなかった。現代において政治・経済的に最も注目されているこの地域に関する情報交換がなされなかったことは、大変残念であった。さらに、アラビア語やヘブライ語資料の MARC 化の研究開発に関する言及もなく、現状を把握することができなかった。我が国においては、アラビア文字もヘブライ文字も図形情報としてコンピュータに入力されているが、実際の資料の情報処理には至っていない。近年益々情報量が増大し、しかも重要性を増しているこの分野の情報の一元化は、将来のこととせざるをえない。このような現状を考慮すれば、東洋文庫が行なったペルシア語文献の総合目録化は、偉業と言っても過言ではない。今後の活動の発展を期待したい。

以上のように、アジア資料をめぐる多様な問題点は1つの図書館のみで解決しうるものではない。それは全世界の図書館が有する問題であり、それらの相互協力の中において検討されるべきものである。ハイ・レベルな東洋学研究を行なう我が国においても状況は同じであろう。そして、高いレベルを維持するためにも、それは必要である。従って、図書館側が行なわなければならないことは、関係諸国との密接な相互協力体制の樹立と、それを担当しうるスタッフの養成とである。

現在、早稲田大学図書館は新中央図書館建設構想を検討中である。新図書館によって旧態然たる現図書館が近代的に生まれ変わるとするならば、それはまさにスタッフの意識変革が行なわれていることが前提条件である。その意味でも、このような国際会議において情報交換し、広い視点から自らを見直すことは、意識変革に極めて有益であり、将来における図書館活動にもたらす影響も大きいと信じる次第である。

註

- (1) 次回第32回大会（ハンブルグ，1986年）からは名称が「国際アジア・北アメリカ（研究）会議」と改められると伝えられている。『『国際東洋学会議』点描⑤』『朝日新聞』昭和58年9月22日夕刊。
- (2) LC ではすでにこのキーボードの概要を発表している。Terminals are Installed to Process Chinese, Japanese, Korean Records. Library of Congress Information Bulletin, vol. 42, No 26, June 27, 1983, p. 215-216.
- (3) 女史は IAOL の第1回総会（キャンベラ）の議事録（International Cooperation in Orientalist Librarianship. Canberra, National Library of Australia, 1972）の編集を行なうなど、国際的な活躍が知られている。
- (4) Smith 氏はチベット仏教に造詣が深く，第3部会（「アジア諸国における仏教及びヒンドゥ文化の伝播と受容」）においてもその資料収集について発表を行なっている。
- (5) この収録作業には，東洋文庫研究員の八尾師誠氏と早稲田大学大学院文学研究科の宇野伸浩氏との御尽力があった。この場を借りて感謝の意を表します。

（1983年10月7日）